

「自分史」：新しい時代の幕開け

「自分史フェスティバル2013」 江戸東京博物館、2013年8月7日

釋 七月子

2013(平成25)年8月7日、東京都墨田区にある江戸東京博物館において「自分史フェスティバル2013」が開催された。残念ながら自分史は未だマイナーな存在であるし、このような催しが開かれたことを知っている人も、少ないのではないだろうか。それに関わらず今回「自分史フェスティバル2013」を紹介したいと考えたのは、多くの人に自分史を知ってもらいたいことと、後で振り返ったとき、この催しが自分史の大きな転機になる可能性を持っていると確信したことにある。

「自分史フェスティバル2013」に言及する前に、自分史の歴史に簡単に触れておきたい。1975(昭和50)年に出版された色川大吉の『ある昭和史——自分史の試み』(中央公論新社、1975年)で「自分史」という言葉が初めて使われたとされている。八王子の橋本義夫が始めた庶民を書き手とする「ふだん記」運動¹の中の歴史的眼差しに支えられた自己表現と切り結んだ部分を歴史学者の色川は「自分史」と名付けた。「ふだん記」運動の一環として書かれた自分史は、1980年代半ばに至るとその様相を大きく転換する。色川はそれを〈第2期の大展開〉²とよんでいる。この時期には、ワープロが登場し、自分史を出版するための出版システムや自分史の書き方を指導する自分史講座などの自分史作り支援が確立された。その後自分史はこれらの支援システムとでも呼ぶべきものの下に拡大定着していくことになる。小林多寿子の言葉を借りると「物語産業」³の誕生であり、その後自分史の自費出版をこの「物語産業」がプロデュースしていくのである。

しかし2000年代に入って、自分史を取り巻く様相が少しずつ変化してくる。それまで自分史は、主に自分自身のことを自分自身で書き、1冊にまとめるのが目的で

あった。ところが、それを最終目的にするのではなく、書かれた自分史を教育、心理学、就職活動、医学、介護などの場で利用する試みが始まった。また東日本大震災によって、多くの人たちが死の自明性を再認識し、さらに高齢化社会という日本の状況も反映し、「終活」という造語まで誕生した。葬儀社を中心とした「終活」ビジネスは、人の一生と関わりの深い自分史も取り込むようになる。ここに至り、自分史は「自分史作品を書く」だけでなく、「ある目的を達成するためのツールとしての役割」も担うようになるのである。このことを強く印象づけたのが「自分史フェスティバル2013」である。

「自分史フェスティバル2013」は「自分史の日」⁴である8月7日に開催された。会場となった江戸東京博物館の所在地墨田区は、関東大震災と東京大空襲で甚大な被害を被った過去があり、また文化面では江戸文化発祥の地として今なお江戸からの文化が息づいている街である。これらの理由から自分史にふさわしい場所として墨田区が選ばれた。主催したのは「一般社団法人 自分史活用推進協議会」(以後、協議会と記す)で、2010(平成22)年に設立された。設立のビジョンは「自分史で日本を元気に!」で、自分史作りのサポートにとどまらず、自分史活用方法の啓蒙・普及、自分史関連商品・サービス・研修などの企画・運営など、幅広い活動を目指している。⁵ また自分史活用アドバイザー⁶の育成にも力を入れている。自分史アドバイザーの資格を取る人は、コンサルタント、司法書士、カウンセラー、葬儀社など自分史関連以外の職業に従事している人も多く、自分史を導入することで事業やビジネスを活性化させる試みを模索していると考えられる。

「自分史フェスティバル2013」では催しを一般の人たちに知ってもらうために、ちらしとFacebookを主に利用した。公式Facebookは開催日の約4ヶ月前に開設されている。実行委員と自分史活用アドバイザーが、知り合いを「自分史フェスティバル2013」の公式Facebookに招待するなど、積極的に活動している。それらが功を奏したのか、1日に300から600ほどのアクセスがある日もあった。開催日の前日には、1446人が公式Facebookの投稿を読んでいる。その他に新聞やテレビといったマスコミも利用して、「自分史フェスティバル2013」の周知徹底を図っている。周到な事前準備をした上で当日に臨んでいることが分かる。

「自分史フェスティバル2013」は午前10時から午後6時までの時間帯で、ホールプログラム、ミニ講座プログラム、展示ブースの3つのプログラムが同時進行していく形で開催された。メインは1階にあるホールで行われるホールプログラムで、ここでは講演やパネルディスカッションなどが行われた。ミニ講座プログラムは1階の学習室を利用して、4つの自分史講座が開講された。参加者を前もって募集し、講師は自分史活用アドバイザーが務めた。展示ブースは1階会議室に設置され、18のブースが用意された。出展したのは、パソコン教室、出版社、商工会、商工会議所、教育メディア関連会社、パソコン関連会社、葬儀社などである。ブースによる展示だけでなく、特設ステージが設けられ、「終活ミニセミナー」「ipadで楽しい思い出整理」など9回のミニセミナーも行われた。⁷

「自分史フェスティバル2013」当日の来訪者数は推定1600人と発表された。このフェスティバルを企画した当初は「300人以上集客」の実現を目指していたので、目標の5倍以上の人が訪れたことになる。今回は第1回であり、まず多くの人に知ってもらうことが重要であるので、ひとまずこのイベントは成功したと言ってよいのではないだろうか。

ここで再度展示ブースを見渡すことにする。出版や自分史関連企業の出展の他に、葬儀社2社が終活・エンディングノートの紹介やミニセミナーを開催したり、若者対象である「13歳のハローワーク公式ページ」が自分史フェスティバルに参加したりしている。さらに福島県浪江町の浪江焼麺太国なみえやまそばたいこくという団体が被災状況の記録写真、避難所生活の写真、中高生の文集などを特別

展示し、震災の記憶と未来への思いを参加者に訴えている。これらの出展は、コミュニケーションツールとして、自己分析ツールとして、またアーカイブとしての役割を自分史が担っていることの証しとなっている。すでに述べたように自分史は学校教育や就職活動などいろいろな分野でツールとして利用されているが、それは各分野が個別に行っているにすぎない。それを「自分史フェスティバル2013」において、目に見える形で、自分史がすでにその段階に入っているということを明示したことに、このフェスティバルの大きな意味があると考えられる。また「自分史フェスティバル2013」が企業参加型⁸であるということはまさに、自分史というものが産業として成り立つことをも意味する。1980年代半ば以降、自分史は「物語産業」がプロデュースし、リードしてきた。そして今、自分史は自分史を書くことで成り立っている「物語産業」から、自分史を一つのツールとして積極的に利用する「自分史産業」の時代に入ったと考えてもよいのではないか。



上:「自分史フェスティバル2013」会場入り口(江戸東京博物館1階ホール)〈筆者撮影〉

下:展示ブース(江戸東京博物館1階会議室)〈筆者撮影〉

しかしこの流れは、本来の自分史のあり方から逸脱する危険性を孕んでいる。ツールとしての役割が全面に出ることにより、自分史の原点が忘れ去られてしまう恐れがあるからである。そのことを危惧した自分史関係者からの揺り返しも起こりつつある。自分史講師の吉村登は『虹』8号の巻頭言（虹の会、2013年）で次のように述べている。

（前略）自分史は「自分のため、自分の未来のため」に書くもの。周期的なブームのような波立ちがあり、文学賞や学会や商業的扇動やらで賑わしくなりますが、それはそれ副次的なことで、まずは文字通り「自分のため」に書くものです。（後略）

自分史が本来の姿を失っていくことへの危機感を持った吉村が、自分史を書いている人たちに、自分史を書くことの意義をもう一度思い起こすよう促しているのである。これは重要な指摘である。しかし「物語産業」が誕生してからの自分史を振り返ってみると、「物語産業」が提供する自分史支援システムによって、自分史が急速に広まっていったことは事実である。新しく生まれつつある「自分史産業」を闇雲に拒否したり批判したりするのではなく、自分史の原点を忘れることなく、良いところは積極的に取り入れていく姿勢こそが、自分史の未来に必要なことではないだろうか。

1
一般庶民の中にある劣等感のようなものや社会からの見えない締め付けを取り除き、できるだけたくさんの人に自由に文章を書いてもらう運動。戦前の生活綴方運動の系譜上にある、大人のための生活綴方運動の一形態と考えられる。

2
『自分史シンポジウム「自分史の明日をさぐる」』報告書（平成11（1999）年12月）p.6

3
「Ⅱ 物語産業から生まれた自分史」（小林多寿子『物語られる「人生」自分史を書くということ』（学陽書房、1997年）

4
「自分史の日」は一般社団法人 自分史活用推進協議会が制定した。
「8月は終戦記念日、広島と長崎の原爆忌など、日本にとって時代を超えて記憶を語り継いでいかななくてはならない日があり、お盆は自分のルーツを思い、祖先に語りかける時季。そして、8（は）と7（な）でかけがえない人生体験を自分史という形で「話し」伝えていくことの大切さを思う日とすることから」8月7日を「自分史の日」とした。
「一般社団法人 日本記念日協会」<http://www.kinenbi.gr.jp/main.php?MD=3&NM=976>

5
「一般社団法人 自分史活用推進協議会」<http://www.jibun-shi.org/>

6
セミナーやアドバイスなどを通じて、ほかの人が自分史をまとめ、自分を見直すことをサポートする仕事「一般社団法人 自分史活用推進協議会」<http://www.jibun-shi.org/>

7
会議室内特設ステージで、4つの企業が2回ずつ、1つの一般社団法人が1回、ミニセミナーを行った。

8
ブース出展した企業の他に、12の企業や団体等が協賛・協力している。